

学校で実施する短時間の情報共有の有効性

学 籍 番 号 209212
氏 名 水流 賢之郎
主指導教員 柿 慶子

1. 研究の背景と基本学校実習 I・IIでの実践

学校現場では、いじめや不登校、その他の多様なニーズを抱える子どもたちへの援助に向けて、担任1人で対応することが難しいことも増えてきている。また、コロナ禍に対する対応を含め、増え続ける様々な課題を抱えながら、教員は多忙な業務に追われている。そのような中、「チームとしての学校の在り方」(文部科学省 2016)が示され、教員と専門家、サポートスタッフ等が協働しながら子どもを援助することが大切であると述べられている。その際に「個別の授業や活動において(中略)事前の打合せや事後の振り返りをしっかりと行うことが重要である」(同 2016)とも述べられているが、過密なスケジュールの中でチーム学校として問題に取り組むための話し合いに充てる時間を捻出することが難しいといった現状がある。そこで学校の実情に応じて、担任に負担がかからないように短時間の情報共有を繰り返し、援助ニーズのある子どもへの援助や担任教員の意識の変化を見ていくことで、その有効性を検討することを目的とした。

基本学校実習 I・IIでは、様々な学年・クラスにおいて主に学習支援をする中で、子どもたちが抱える援助ニーズについてアセスメントしながら支援した。そして、そこから筆者がサポートスタッフとして、どのように担任と協力していくことができるのかについて考えた。

2. 実践研究 I : インタビュー調査

筆者のような第三者としてクラスに介入する立場の者が、どのように担任教員と一緒に子どもを援助していけばよいのかについて、担任教員の意識や考えを知りたいと考えた。クラスの中で担任教員が行っている支援や注意している子どもについて等、実際にどのように情報共有していくべきか、また、支援するにあたってどのように連携していけるのかに関して、担任教員の考えを知ることを目的としてインタビュー調査を行った。

その結果、「担任が行っている援助」「実習生に求めるもの」「担任の子どもたちへの指導・支援の方針」「情報共有の方法」「様々な立場の先生が支援」の5つのカテゴリーを抽出することができた。「担任が行っている援助」としては、<子どもを褒めながら育てる>ことを大切にしながら、<全体の中での個別支援>や<しんどさや困り感を見逃さない>ことを意識している。「実習生に求めるもの」では、実習生の<子どもとのかかわり方>として、子どもと『いっぱい喋って子どもの思いなどを引き出』せたらと望んでおり、

その情報を伝えてもらうことで、担任自身の支援に活かしたいと思っている。「担任の子どもたちへの指導・支援の方針」は、普段から子どもたちを『沢山褒めて、学校が安心する場所』だと感じてもらえることと『叱るべきところは叱る』というルールとリレーションに基づくものである。「情報共有の方法」とは、最適な援助を提供できるよう担任と実習生で方針を考えていくためのものであり、「様々な立場の先生が支援」することとして、『それぞれの子どもの個性に合った先生が支援をすること』も有効である。

3. 実践研究：担任教員との情報共有

担任とサポートスタッフである筆者とが情報共有を実施することで、お互いの見えない部分を共有し合い、子どもが持つ様々な援助ニーズに対しての支援に繋げていくことを目的として、全8回行った。情報共有シートは6回目以降使用したが、担任教員との情報共有をもっと分かりやすく短時間で行えるツールとして、筆者と担任教員が協議して作成したものである。インタビュー調査の内容は、すべて逐語記録にし、5名の子どもの話、学級全体の話、その他に分けて、それぞれの時間の長さを測定し、その推移を見ていった。当初、情報共有の時間の設定を依頼した時には、5～10分を予定していたが、担任教員と筆者がそれぞれの子どもへの理解が深まるにつれて共有したい内容が増え、情報共有の時間が延びていった。情報共有の内容では、回を重ねるごとに良いエピソードが増えてきたが、情報共有することで支援が進んだ結果、良いエピソードが増えたということが考えられると共に、それまで意識しにくかった良いエピソードを情報共有することで意識できるようになったとも考える。8回の情報共有を終えた後に担任教員からは、「情報共有シートの導入によって、子どもへの接し方を改めて意識するようになった」ことや「実習生がサポートスタッフとして担任と役割分担しながら支援できることは有効であった」ということが語られた。

4. 総合考察

今回、打ち合わせの重要性と教員の多忙さの両方を鑑みて、「情報共有（打ち合わせ）はできるだけ欠かさず行うが、1回あたりの時間を短くする」という方法が子どもの支援にどのぐらい有効であるのかを検討した。情報共有を始めた頃は、情報共有する内容も限られていたが、時間が経つにつれて、情報共有を意識して、いつも以上に子どもの言動に注意を配るため、様々な子どもの多様な援助ニーズについて共有することができるようになった。そして、情報共有した内容を踏まえた上で子どもの支援を考えていくこともでき、子どもたちの良いエピソードが増え、最後には担任教員から情報共有ができてとても良かったという評価をいただくこともできた。

課題としては、短時間での情報共有ということ意識しながらスタートしたが、次第に時間が延び、担任の貴重な時間を使ってしまったことである。また、子どもの困り感などが減ったかどうかを客観的な指標を用いてデータ化することができなかったことがもう一つの課題である。欠席や遅刻の回数、観察から得られたデータ等、明らかにすることができれば、さらに情報共有の効果を検証することができたと考える。